

明るい暗室

近藤啓太郎



明るい暗室

近藤啓太郎

実業之日本社

明るい暗室

◎近藤啓太郎
一九八五

一九八五年十一月二十五日初版第一刷発行

著者 近藤 啓太郎

発行者 増田 義和

印刷 東京研文社

製本 共文堂

発行所 実業之日本社

東京銀座一―三―九

振替 東京一―三二六

電話東京五六二―二〇五一(編集)

五三五―四四四一(販売)

ISBN 4-408-53062-X

明
る
い
暗
室

仕事に疲れて大矛が寢床おほこで休んでいると、隣室の書斎で電話が鳴った。書斎の電話は大矛専用で、階下の家庭用とは別番号になっていた。大矛が書斎へ行って受話器を耳にあてると、少しふるえをおびた緊張した女の声が聞こえた。

「もし、もし。大矛先生のお宅ですか」

「はい。大矛ですけど……」

「わたし、幸子こうこです。ご無沙汰しますけど、先生、お元気ですか」

「幸ちゃん……」

と大矛は驚いてから、今度はなつかしそうに言った。

「ほんとに、久しぶりだね」

「すっかりご無沙汰しちゃって、ごめんなさい」

と幸子はほっとした声になった。

「相変らずお忙しいの」

「まあね」

「一度、久しぶりで先生にお眼にかかりたいんだけど、今日はお忙しい？」

「幸ちゃんが会ってくれるんなら、万障くり合わすさ。昔、いつも会っていたホテルへきてくれる？」

「わかったわ」

大矛は時間その他をうちあわせてから電話を切ったが、胸は激しくときめいていた。

幸子の美少年めいた冴え返った美貌、白いしなやかな肉体、ひらきかかった薔薇の蕾に似た極上の性器。それらの映像が大矛の眼底に浮かんできて、欲望で全身の血管がふくれ上った。

幸子が結婚するにあたって大矛と別れてから、十年たっていた。今や大矛は五十三歳、幸子は三十二歳であった。幸子は強引な行動を取って大矛と別れたので、電話がかけづらくて声がふるえたのであろう。躊躇を押し切って電話してきた点に、好色な幸子の欲望の激しさがうかがわれた。幸子の虹色に輝く大きな眼、突き出るように張り切る乳房、とさらに映像は重なったが、ふと大矛は待てよと思った。

幸子は三十女になっている上、子供を生んでいるのだから、別人のように醜くなっているのではないのだろうか。十年もたって再会すると、思わず「神様！」と叫びたくなるよ

うに變りはてた女は珍しくない。

いや、幸子の顔と肉体は崩れる性質のものではない。むしろ、幸子は三十女になって、艶やかな美に輝いていのではないのか。そう思い返すと、大矛の胸は再びときめいた。これから家を出てホテルに行くと、約束より一時間以上も早く着くと思いつながら、大矛の気持はそぞろになってじっとしていられなくなってきた。

大矛は階下へ行くと、美智子を呼んで外出の支度をはじめた。

「わたしたち、明日の日曜は朝からゴルフで留守なんですけど、今夜、帰ってきますか？」
「さあ……？　麻雀で徹夜になるかもしれないな」

「じゃ、明日帰ってきたときの用意に鍵を持って行って下さい」

美智子は大矛に対して自由放任の態度を取っていて、いちいち行先を訊くような真似はしなかった。大矛にとっては寛容性に富んだ有難い妻であったが、それだけにいったん忍耐の緒が切れたときの怒りを思うと恐しく、乱行の歯止めになっていた。考えてみれば、大矛は一見自由に飛びまわる風のようなもので、元紐は美智子の手に取りられてあやつられていたようなものであった。

ホテルに着くと大矛はルームサービスに料理の注文をしてから浴衣に着替えたが、一週間前に仕事でチェックインしたときとちがって、明るいコンパクトな部屋が急に色めき立

って感じられた。白いベッドが薔薇色に彩られ、幸子の華奢な肉体がしなやかに横たわるのが見えた。大矛は苦しいくらいに欲望が高まってきて、何度も熱い溜息をついた。

十年前、幸子は市長秘書だったが、今もまだ市役所に勤めているのだろうか。昔も今日と同様、土曜日の密会が多かった点を考えると、幸子は相変らず市役所に勤めているのであろう。約束の午後一時は、幸子が市役所を終わってから車を運転してきてホテルに着く時間である。

幸子と別れてから十年後の今日、世の中はかなり変った。このホテルにしても、昔はシングルの部屋で密会しているのが従業員にわかると、フロントから咎められた。が、今は何ひとつ文句を言わない。都市ホテルを密会用に使う者があまりにも多くなったので、営業方針を変更したのであろう。特に土曜日は密会の客で満員になる場合が多いようで、一億総浮気時代と言ってもいいようなところがある。大矛はこのホテルの特別会員なので無理がきき、今日の土曜日もうやら部屋を取ることが出来た。

大矛は幸子の到着を待ちながら、濃密だった二年半の経緯を思い出していた。幸子と別れたのは昭和三十七年の秋で、知り合ったのは三十五年の春であった。

昭和三十五年三月中旬の昼すぎ、リビングルームで大矛が美智子と茶を飲んでいると、チャイムが鳴った。お手伝いの和枝が玄関へ行行って戻ってくると、大矛に名刺を渡した。「市役所の人が迎えにきました」

大矛が名刺を見ると、「秘書課中川幸子」と記してあった。大矛は美智子に送られて玄関へ行ったが、挨拶する幸子を見た途端、息をのんで立ち竦んだ。

美少年という感じの若い女で、輪郭のくっきりとした硬質の顔が冴え返ったように美しい。紺のスーツを着た肉体の線はすっきりとしていて、笑顔がとても可愛らしかった。大矛は年甲斐もなく憧憬の情を感じて、挨拶を返すことさえ忘れていた。

「まあ、お綺麗な方ね」

と美智子は思わず感嘆の言葉を発してから、笑顔で大矛をふり向いた。

「こんな綺麗な方のお出迎えを受けて、あなたもピンチヒッターをひき受けた甲斐があったわね」

武蔵野地方の同じ市に住む先輩作家が風邪で寝こんだので、大矛は市役所主催文化講演

会のピンチヒッターをたのまれたのであった。

大矛が玄関を出ると、幸子は先に立って門前に停めた古ぼけた小型車に案内した。

「こんな車ですみません。こっちの方が楽だと思えますので、どうぞ」

と言って、幸子は助手席のドアを開けた。

幸子は大矛と並んで運転席に腰かけると、気にしてまた言った。

「窮屈ですみません」

「大丈夫。全然、窮屈じゃないよ」

大矛は百八十センチ、九十五キロの巨体だったので、かなり窮屈だったが、機嫌のいい顔で言った。幸子が美人でなかったならば、大矛はボンコツ車の出迎えを不愉快に感じたにちがいがなかった。が、大矛は不愉快を感じるよりも、窮屈そうな太鼓腹を気づかう幸子の視線が気になってならない。醜い自分が厭で、恥ずかしくてならなかった。

幸子が運転をはじめると、大矛はほっとして煙草に火をつけた。幸子はすぐに気をきかして灰皿を引き出し、大矛は窓を少し開けた。

「わたし、煙草は平気ですから、気になさらないで下さい」

「いや……」

と言ったまま、大矛は黙りこんで煙草を吸った。

大矛は幸子に話しかけたかったが、気軽に口がきけなかった。遊び馴れた四十男の大矛も幸子に憧憬を感じた瞬間から、少年なみに臆病になっていた。気のきいたジョークでも言い、幸子の気持を惹いて近づきたかった。が、大矛は一向に面白い話題が思い浮かばず、あせるばかりであった。

こんなこと、学生時代以来のことかもしれない。大矛はそう思うと、ひそかに苦笑して溜息をついた。と同時に、学生時代の失敗を思い出していた。

大矛は大学一年のとき、喫茶店の女に恋して毎日通った。喫茶店では客の注文を聞いてレコードをかけるのだが、大矛は彼女を呼んでいつもクラシックをたのんだ。流行歌ではなくクラシックを注文することによって、大矛は教養の高さを示して彼女の気持を惹こうと思っていた。ひとつには、恋した女は女神めいて見えるものなので、大矛は彼女もまた高尚な趣味の持主であり、当然クラシックファンと思っていたからだ。ところが、毎日通っているうちに、彼女は流行歌のときは愉し気に爪先でリズムを取っているのに反して、クラシックのときは冷たく取り澄ましている事実気がついた。思惑に反して、流行歌の好きな彼女は年中クラシックを注文する大矛を高級ぶった厭味な学生と感じていたのであった。

男は年配になってからも、この種の失敗をくり返しやすい。男自身は女の外形に惚れる

くせに、女は男の内容に惹かれるものと錯覚しやすかった。結婚の場合、女は男の内容を重視するので、つい錯覚を起こしてしまうのであらう。結婚は女にとって一種の就職だということ忘れて、浮気の場合も同様に解してしまう迂濶さによるものであった。

女も浮気相手は外見の好い、遊んで愉しい男を好むにきまっている。で、醜男で太鼓腹の大矛の場合、物心両面からせいぜい女のご機嫌を取って歓心を買う以外になかった。事実、その手で大矛は数多くの浮気を愉しんできた。が、今日は幸子のあまりの美しさに憧憬を感じて、つい日頃の自分を失っていた。

無論、大矛は教養の高さを示そうとは思っていなかったが、ひたすら気のきいたジョークを探している点、男の内容で女を惹こうとするに似たところがないではなかった。いや、それ以前の問題において、幸子の気持を惹こうと思うこと自体、噴飯ものだ。そう気がつく、大矛はまたひそかに苦笑した。幸子は水商売の女ではない上に、大矛と親子ほども年がちがうのだから、土台、浮気の対象になる筈がないのであった。

講演の先生と市役所の女の子という関係を自覚すると、大矛は急に気楽になって幸子に話しかけた。

「中川さんはサッチャンか、ユキちゃんか。どっち？」

「どっちでもないんです。コウちゃんです」

と幸子は笑って言った。

「うちの父が単純だもんですから、幸福の幸だから、コウコなんですって」

「なるほど。サチコやユキコはありきたりだから、コウコの方がいいよ」

「先生にそう言われて、安心しました」

「幸ちゃんは幾つ？」

「十九です。去年、高校を出て市役所に就職しました」

「十九とは若いなあ。ぼくより二十一も年下っていうわけだ」

「すると、先生は四十？ わたし、三十六、七かと思ってました」

「しまった。サバを読めばよかった」

と大矛は朗らかに笑った。

「先生は氣むつかしい方かと思ってたんですけど、陽気なんですネ」

「とても陽気。特に、幸ちゃんみたいな若い美人と一緒にいると嬉しくって、朗らかになっちゃう。こんな別嬪、見たことない」

大矛がわざと流行歌を唄う口調で言うと、幸子は嬉しそうに赤くなった。大矛は幸子をあきらめてはいたものの、男のほとんどがそうであるように万に一の僥倖を願う気持ちが無いわけではなかった。で、大矛は駄目でもともとと思いいながら言っただけを見た。

「一度でいいから、幸ちゃんみたいな美人と食事してみたいな」

「先生は冗談が好きですね」

「冗談だなんて、とんでもない。ほんとに一度でいいから、食事につき合ってもらえないかな」

と大矛は強引に押して見た。

「ほんとですか」

と幸子は前方を見たまま、また少し赤くなって訊き返した。

「もちろん」

「今日は夕方からひまなんですけど」

「じゃ、善はいそげだ」

大矛は冗談めいて言いながら、不意に胸が鳴り出すのを感じた。無論、その反面、大矛は馬鹿々々しい興奮だと思っていた。幸子は親子ほども年のちがう大矛への安心感から、食事の誘いに応じたにすぎないであろう。

講演後、行先が同方向の市長が大矛を家へ送った。七十すぎの市長はきさくな人だったので、大矛は気軽に話しかけた。

「今日迎えにきてくれた中川さんという秘書、あんまり美人なんでびっくりしちゃった。

あんな美人と毎日一緒に働いている市長さんがうらやましいな」

「いや、全くわたしもあの子がきてから、すっかり若返っちゃった。その上、あの子は美人を鼻にかけないで、骨身惜しまず働くところが、何よりもいい。わたしが若かったら、絶対にお嫁さんにもらっちゃうな」

「同感」

「あの子は頭がよくて高校の成績も拔群なんだけど、何しろ子沢山の八百屋の長女だもんだから、大学へ進めないで可哀想だった。いずれ、いい縁談を世話してやろうと思ってるんだけど、ほんとにあんな子は今どき珍しいですよ」

大矛は帰宅してひと休みすると、煙草を灰皿にすてて言った。

「ぼつぼつ、ホテルへ戻るとするか。ピンチヒッターをやったおかげで、仕事の予定が狂っちゃったよ」

「ご苦労さまね」

と言って、美智子は玄関へ送ってきた。

三十四歳の美智子は温和ながまん強い女で、遊び好きでわがままな大矛を許してつれそつていた。浮気も女人相手は眼をつぶっていたが、素人は絶対に許さないと聞いた。女人はいわば売物買物であるのに反して、素人は厄介が起こりやすいので絶対に許さなかった。

そして美智子は、ワイシャツについた口紅を見てもヒステリックに怒る人妻が多い今の世の中で、玄人との遊びはがまんしているのだから、よもや大矛が素人と浮気することはあるまい、と思いきりこんでいた。大矛は甘い考えの美智子を幸いにして、素人とも浮気してきただ。素人との浮気がばれたときの美智子の怒りを想像すると、大矛は恐しかった。が、その恐怖が刺戟になって、青い火花の散るような秘密の快楽感を助長していた。

夕方、ホテルのレストランで大矛は幸子と食事していた。

「幸ちゃんみたいに抜群に綺麗な女の子って、美少年に見えるもんだね」

「美少年？」

と幸子は驚いてから、昼と同じことをくだけた口調になって言った。

「それより、先生はほんとに若いですね。どうしても、三十六、七にしか見えないわ」

「嬉しいことを言ってくれるね」

「先生、年のこと、そんなに気になりますか。わたし、気にならないけど……。だって、年が若くっても活気がなくて、外見も気持も老けている人がけっこう多いし、その反対の人もいるでしょ？」

「そりゃそうだけど、それは幸ちゃんが若いから言えることなんだよ。四十になると、やたらに年のことが気になっちゃってね。若い人がうらやましいよ」